

学位請求論文 審査結果報告書

提出者：高見純

論文題名：「中世末期ヴェネツィアにおける福祉：大兄弟会による救済と相互扶助から」

本論文は、ヴェネツィアに叢生した「兄弟会」に関する考察を重ねながら、15～16世紀ヴェネツィア共和国の社会経済史について、いくつかの重要な貢献を含む研究成果である。

本論文が直接の考察対象とした「兄弟会」とは、キリスト教世界に誕生し、西ヨーロッパ世界で独自の発展を遂げた組織体である。この類型の組織は、現代社会の「相互扶助組織」に相当し、また「財団」Stiftung, Foundationの原型となった。ヨーロッパ史全体の文脈で考えた場合、同時期のヴェネツィアで初めて先験的に出現し、その後、このヴェネツィア・モデルをまねて、ヨーロッパ各地で形成されていった。したがって、その誕生過程と、初期段階での発展の経路を分析することは、その後に誕生する「ヨーロッパ近代社会」の構造的解明に資することになる。つまり、本論文は、今日的な「財団」および「会社」組織の原型であったヴェネツィア兄弟団の財政基盤について、形成過程、活動内容、富の再分配メカニズム（互助活動、救済活動等）にわたり、原史料にもとづき分析したとあってよい。

本論文は、全体として7章構成になっている。各章の概要は以下の通りである。

第1章「兄弟会と救済」

西欧都市における物質的救済についての研究史を整理している。その上で、本論文が扱う兄弟会（複数）を紹介し、物質的救済においてどのような役割を果たしたのか検討する。特に、14世紀中盤以降のペスト流行と、西欧各都市で外部貧民への救済改革条例が公布された16世紀前半に注目し、両時期を画期とする物質的救済の有り様の変化を議論し、本論文が扱う時期の性格を明確にしている。その上で、兄弟会の活動・類型を整理し、活動の1つであった物質的救済、及び都市の福祉に兄弟会占めた一般的役割を確認している。

第2章「15世紀ヴェネツィア社会と大兄弟会」

当該期のヴェネツィア社会について、議論の前提となる諸特徴を（2次文献を用いて）確認している。まず、都市財政における公債の重要性が指摘される。圧迫するのは軍事だった。イタリア半島内部の領域拡大を志向し、他都市との衝突が頻発する時代の軍事編成、および地中海でのオスマン・トルコ伸長による海上リスク増大の影響を、史料所言によって確認し、次に、大兄弟会運営にも深く関与した「市民」の定義をする。16世紀後半には固定的な身分になるものの、15世紀段階では、「市民」なる史料用語が指し示す対象は流動的だったことを指摘する。語義変化を跡付けながら、この時代の「市民」の範囲を丁寧に検討する手法は、誠に手堅い。第3に、都市ヴェネツィアに存在した兄弟会について、種類・活動・特徴を確認する。

第3章「都市政府と大兄弟会」

大兄弟会を直接管理した十人委員会の議事録資料を中心に分析し、政府と大兄弟会の関係性、及び、政府が期待した大兄弟会の役割を検討する。大兄弟会は、都市の治安を乱す可能性から政府の監視・管理の対象となったが、他方で、豊富な資産、提供する精神的・物質的救済は、政府を構成した貴族層を含む都市住民にとって魅力的だったから、政府はこれらを積極的に利用した。救済や金銭的負担のみならず、戦争時の軍隊編成においても貢献を求められた様子が紹介されている。なお、本章の一部は、昨年（2018年）8月末にローマで行われた国際学会 EAUH 2018 (14th International Conference on Urban History) にて、「Poor relief and Confraternities from 15th to 16th century in Venice」という題名で報告された。

第4章「帳簿の作成：アーカイブズにみる展開」

“La Contabilità della Scuola Grande di San Marco nel tardo Medioevo a Venezia”, *Mediterranean World*, XXIII, The Mediterranean Studies Group, Hitotsubashi University, 2017, pp. 223-243. を加筆・修正して作成した部分である。大兄弟会の財産形成、及び適切な運営を可能にする一因を、残存する記録資料の性格から考察している。ヴェネツィアは、複式簿記生成に貢献した都市の1つと認識されるが、それは、現存する僅かな商業用簿記からの評価によっている。そこで、15世紀の大兄弟会の会計帳簿から、商業以外を目的とした活動においても、当時のヴェネツィア式簿記の知識が多く活用されたことを確認し、都市社会における知識普及状況の一端を明らかにした。

第5章「兄弟会の収入：15世紀聖マルコ兄弟会の運営と組織」

15世紀の大兄弟会の拡大要因を、収入面から検討している。まず、会の組織構成を確認する。すでに15世紀の聖マルコ兄弟会では、現実の社会階層を反映するかの如く、貧富による会員区分、一部会員による名誉ある役職の独占が見られた。これは、中世イタリア研究における一つの注目すべきファクトファインドと言ってよい。次に、1430年代の同兄弟会の会計簿から収入を分析した。遺産財源を元手とした公債利子収入が、物質的救済を含む兄弟会運営の安定を左右し、活動の拡大には、遺産獲得が重要だったことを確認する。これを受けて、会の遺産獲得の傾向を検討し、兄弟会への遺産が、単純な寄付ではなく、遺産管理を含めて委託される傾向にあったことを明らかにした。なお、本章は、『西洋史学』（日本西洋史学会）に投稿、受理される見込みである。

第6章「「貧者」への支出：15世紀聖マルコ兄弟会の貧困救済」

『社会経済史学』第83巻2号掲載の「15世紀前半期ヴェネツィアにおける大兄弟会の貧困救済」稿を加筆・修正したものであるが、支出内容を分析し、15世紀前半期における兄弟会の物質的救済活動を検討している。まず、具体的な支出内訳から、兄弟会活動の全体的実態の描出を試行。その上で、活動全体に占める物質的救済の大きさを評価し、具体的な救済活動項目の検討を行い、実相を見事に明らかにした。この実証研究は、第一級の歴史研究の成果と言ってよい。救済活動は、兄弟会内部の会員向けに限定され、閉鎖的であったが、全支出に占める割合が大きく、比較的安定的に実施されていた。

第7章「15世紀後半以降の大兄弟会と聖マルコ兄弟会」

聖マルコ兄弟会が、15世紀後半の本拠地火災、及び支払いが不安定化する公債利子への依存という問題によって、経営状況を悪化させていったことを論じている。その上で、聖ミゼリコルディア兄弟会の15世紀後半期の会計簿分析を通じて、二つの兄弟会の事例が比較されている。大兄弟会間における経営的性格の相違が、その後の財政運営・規模への相違をもたらした可能性を検討した点は、その後ヨーロッパ世界で発達するこの種の団体の、初期における実態を明らかにした点で注目される。

「結論」

ここまで検討してきた大兄弟会の組織・活動・性格を踏まえて、15世紀ヴェネツィア社会における大兄弟会の位置取りを改めて検討する。大規模な、開かれた港湾都市だからこそ、会員内部への閉鎖的な救済を拡大させることによって都市住民への福祉を提供した大兄弟会。その役割と意味を考察し、15世紀イタリア都市社会での文脈に本論文のヴェネツィアの事例を位置付けている。

なお、末尾に付録された資料「聖マルコ兄弟会の会計簿（1430-1438年）」は、執筆者のヴェネツィアでの研鑽の第一級の成果として、高く評価されてよい。未刊行史料の翻刻という困難な仕事を見事に成し遂げ、イタリア学界でもすでに注目されている。

以上に瞥見したように、本論文は、15世紀ヴェネツィア社会を原史料を厳密に分析している点で、まず第一級の歴史研究として高く評価されよう。また「近現代経済」の源流におけ

る経済社会システム分析であることによって、現代経済、特に中間団体の経営のあり方を考察する上でいくつもの点で重要な示唆を与えている点でも注目される。第1に、ヴェネツィアの兄弟団は、上述の通りその後「財団」「会社」へと発展していき、かつその財産基盤のあり方を原初的に規定したので、現代経済の重要なアクターである同種の組織研究にとって重要なインプリケーションを提供していた。第2に、同時期のヴェネツィア社会には「自由な経済空間」が形成され始めたことにより、その主要なアクターとなっていった兄弟団の財産、またその財産形成過程は、今日的世界の縮図であった点で、重要な示唆を与えている。第3に、兄弟団の会計が複雑化し、入出金の項目が多端になったことから、いわゆる複式簿記がヴェネツィアで誕生することになったので、現代に至る「会計」の源流を研究している。最後の点について付言すれば、本論文の研究成果は、すでに会計学、会計史学会から大いに注目されている。

以上の理由から、本論文が、本研究科の博士学位授与に十分に相当する水準にあるものと判断し、ここに報告する。

2019年4月30日

審査員（五十音順）大月 康弘（主査）
高田京比子（神戸大学教授）
高柳 友彦
徳橋 曜（富山大学教授）
森 宜人